学校教育目標　かしこく　たくましく　心豊かな　児童の育成
目指す児童像　瞳・笑顔・汗・会話　きらきら輝く　鈴谷の子

令和６年１月３１日号
家庭数配付

鈴谷小だより

令和５年度　第10号
さいたま市立鈴谷小学校　☎８５２－５６７５
鈴谷小Ｗｅｂページアドレス　https://suzuya-e.saitama-city.ed.jp/

目標はただもつだけでは駄目である

校長　　中田　清人

「ああ、やはり」と思わせてくれたのが、青山学院大学の原晋監督のインタビューでした。何が「やはり」なのかと言うと、原監督が、「選手たちには、考えさせたい。箱根駅伝を通して考える力、問題解決力を付けさせたい。その先に、箱根駅伝優勝や連覇がついてくるのが理想」と、大体こういう趣旨だったと思いますが、語ったことです。

箱根駅伝の優勝をゴールにしてしまうと（それだけでもすごい目標設定ですが）、優勝した先には目標がなくなってしまいます。また、優勝できた青山学院大学は目標達成できたからよいとしても、優勝できなかった他の大学には、チャレンジした価値はなかったのでしょうか。

そうではありません。学生にとって社会に出てからの人生の方が圧倒的に長いですし、原監督の言いたいことは、大学卒業後の人生において、自分で考え課題を解決しながら生きていく力を育てたいと、こういうことなんじゃないでしょうか。いわば、箱根駅伝は「**目的**」ではなく「**手段**」という訳です。「箱根駅伝（**手段**）の優勝を目指す」こと（**ねらい**）を通して「人生において必要となる資質＜問題解決力・協働する力・生きる力等＞を身に付けさせる。」（**目的**）とすると少し分かりやすいでしょうか。

こうした考え方は、学校教育にはすでに根付いていると言えます。どのようにして目標をもたせ、達成に向けて子ども達の意欲を高めたり、支援をしたり、時には叱咤激励をしたりするかを考えることはすでに行っていることですし、非常に大切です。優勝を逃した他の大学にとっても「なぜ負けたのか」を考え、次に向けて考えたり取り組んだりしていくことが重要です。ですから目標に向けて取り組んできたすべての学生にとって、箱根駅伝は価値のあることだと言えるのではないでしょうか。

さて、始業式では私も含め、多くの先生方によって「目標をもつこと」を話題にし、子ども達への意識付けを行いました。目標をもつことは、主体的に取り組むことにもつながり、極めて大切な営みです。ただ、スタートはここからと言えるかもしれません。課題解決へのアプローチ（**計画等**）が適切かどうか、解決に向けて主体的に取り組めているか（**主体性、学びに向かう人間性等**）、課題解決の過程において、知識や技能は活用されたり、新たに獲得できたりしているか（**知識・技能等**）。こうしたことを指導者や学習者自身が振り返り（**振り返り**）、吟味する（**評価する**）ことが重要です。うまくいっていないのだとすれば、何がマズかったのか、原因を探る必要があります。そして、改善に向けて修正したり、新たな目標を設定したりすることが求められます（**改善する**）。

３学期は、こうしたマネジメントが特に求められる時期でもあります。目標がどうだったか、次に向けて何が必要か、私は校長として、学校教育目標に照らして学校経営の評価をしたり、改善をしたりしていきたいと思います。